

## 道徳における『向山型』指導法の基本

# 「人間の生き方の原理・原則」を教える

道 — 人間の生き方としての基本原則  
徳 — 具体化して体現して、人間としてできるように実行して、それを備える

## <TOSS道徳が提唱する「人間の生き方5原則」>

- 1\_相手のことを心から考えよう
- 2\_弱いものをかばおう
- 3\_世のため人のためになることをしよう
- 4\_まず自分にできることをしよう
- 5\_先人に学ぼう



向山洋一・明治図書「『社会的規範』を考へる道徳教育の提唱」P.182

## 授業づくりの基本

### A.力のある資料

- ①聞くだけで、心に葛藤が生じる教材
- ②「事実に裏打ちされた力」がないといけない。

### B.力のある授業

力のある授業とは、教師の確信から生じる。  
こうした教育が必要である—という確信のもとに力のある授業は行われる。

### C.体験・知見に支えられた「語り」

- ①教師は「説教」(説く)より、「描写」(語る)べきだ。
- ②語る内容は、選び抜かれたものでなくてはならない。

【キーワード】 ①事実に基づく資料・教材 ②教師の確信 ③描写 ④語り

## 向山洋一氏の実践から紐解く、『向山型』道徳の授業スキル

1. 実際のエピソードを「読み聞かせる」
2. 実際のエピソードを、映像が見えるように「語る(描写する)」
3. 描写を補完するために、コンテンツを使用してもよい
4. 「読み聞かせ」と「語り」の往復で、授業を組み立てる(振り子・スパイラル)
5. 事実をもとにして「判断」させたり、「議論」させたりする

### (1) 教材文にある「事実」を根拠に判断させる

#### 「いなむらの火」(道徳研究授業メモ1983.11.7)

- ①「稲に火をつける」以外に、村の人に危険を知らせるための方法はありませんか。(大声を出して村人を集める、半鐘を鳴らすetc.)
- ②稲は百姓にとってどのようなものですか。文中から探しなさい。(大切なもの)
- ③五へいはなぜ、大切な稲に火をつけたのですか。(できるだけ早く村人全員に危険であることを知らせなければならなかった)
- ④子供の頃に、五へいはなんの話聞いていたのですか。(見たこともない海底が現れるとき、大津波が来る。大津波が来たときは、一刻も早く村人を高台に集めなくてはならない)
- ⑤五へいの行動を、あなたならできますか。

### (2) 実在の人物のエピソードを「語る」

#### 「マーク・スピッツ」の授業(1993.法則化本合宿)

昔、スピッツとかいう、名前は忘れてしまいましたけれど、オリンピックの水泳選手がいて、泳ぐたびにオリンピック新記録、金メダルを4つも5つも6つも取ったと思います。その人のインタビューで、「あれだけ強くて、ダントツなので、昨日もゆっくり眠れたでしょう」と聞いたら、泳ぐたびにオリンピック新記録を作った、金メダルを4つも5つも6つも取った人間が、「昨夜は試合が心配で、1時間しか眠っていません」と答えました。それだけ強い人間が、試合の前日に1時間2時間しか寝てられない。  
そんなことを、たとえば、子供たちに語って聞かせる。そういうことに意義がある。

### (3) 「読み聞かせ」⇔「語り」の往復運動

#### 岩根小学校「心の教育」フェスティバル(1996.1.20)

- ①人間として守るべき4つのことを「語る」。  
※予定は、羽仁監督の「狼が仲間をかばう」映像を流す。
- ②外国⇔日本の子供の作文を「読み聞かせる」。  
↓  
感想を聞く。
- ③絵本「私のいもうと」を読み聞かせる。
- ④人間の脳の話「語る」。(「脳内革命」のヘビの脳・ネコの脳・ヒトの脳の話)
- ⑤苦しくても頑張っている子の作文を「読み聞かせる」。(朝日作文コンクール入選作品を活用)
- ⑥「私と小鳥とすずと(金子みすゞ)」音読

### (4) 事実に基づく資料をもとに、議論させる

#### 「命」の授業(父母参観の授業)

- ①OHPに5つの胎児を映し、どれが人間のものか予想する。  
→成長につれて人間以外のものがはっきりしてくる
- ②母子手帳を用意させ、生まれた時の体重を聞く。
- ③3歳児健診の時の成長ぶりを確認する。  
↓  
現在の自分と比較する
- ④「人の生命」に値段をつける。※元素に分解して、示す。  
わずか数千円の値がつく。  
↓  
「文句、ありますか?」と聞く。  
子どもたちは騒然となる。(論争状態になる)

### (5) エピソードを紹介し、予想させる

#### 「広中平祐・京都大学教授」の授業(5年実践)

- 次の①~⑦の言葉はある一人の人物が本当に言った言葉ですが、どんな人が想像しなさい。
- ①「ぼくはたし算は得意じゃないし、ひき算ならまあね…」
  - ②(大失敗の時は)「もうなんでこんなにバカに生まれたんだろう。そのたった一事がどうして気がつかないんだらうと思いました。」
  - ③「ぼくが本当に成功した例は2回ぐらいですね。失敗した例は、大きな失敗は3回ぐらいかな。だけど小さい失敗はしょっちゅうしています。だから失敗に慣れちゃって、失敗なんかへとも思わなくなりました。」
  - ④「だいたい、予測の速いやつってのは伸びないね。聞いてね、『わからん』と考へ出して、1週間ぐらいして『わかりました』ってやってくるやつの方が伸びるね。」
  - ⑤「ぼくは幸か不幸か生まれつき鈍だから…鈍才肌なんだ。」
  - ⑥「ぼくはね、学生の時からそんなに成績も良くなかったし、いちばんビリっけつでもなかったけど、上の方でもなかったんだよね。いつもまん中よりちょっと上ぐらいの所だよ。」
  - ⑦「僕なんか、田舎の高校を出て、大学にビリぐらいで入ったわけですよ。」